

# 花よりもなほ

2006(平成18)年6月4日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★



原案・脚本・監督＝是枝裕和／出演＝岡田准一／宮沢りえ／田中祥平／古田新太／香川照之／田畑智子／上島竜兵／千原靖史／木村祐一／加瀬亮／絵沢萌子／平泉成／夏川結衣／國村隼／寺島進／遠藤憲一／田中哲司／中村有志／中村嘉律雄／原田芳雄／石橋蓮司／浅野忠信(松竹配給／2005年日本映画／127分)

## 第2章

DVDでじっくり鑑賞したい

……『誰も知らない』(04年)に続く是枝裕和監督の作品は「仇討ち物語」だが、時代が『忠臣蔵』と同じということがミソ……？ 耐震強度偽装問題、ホリエモン騒動に続いて村上ファンドの強制捜査等、近時の日本のキーワードは「偽装」。そんな中、『忠臣蔵』と正反対の弱いお侍が、「破れ長屋」に住む底辺の町民たちの応援をうけて決行する「偽装」仇討ちは、そんなに肯定されていいの……？ 「大願成就」にいい気にならず、その是非論も真面目に検討しなければ……？

### 『誰も知らない』の是枝裕和監督の次のテーマは……？

是枝裕和監督の『誰も知らない』(04年)は、主役の柳楽優弥が2004年の第57回カンヌ国際映画祭で最優秀男優賞を受賞し、日本でも大ヒットしたため、今や「誰も知らない人はいない」映画となった。すると難しいのはそれに続く作品で、下手をすると新人王を獲得した野球選手がよく「2年目のジンクス」と言われるような惨憺たる結果に陥る危険性も……？

そんな是枝監督が自ら脚本を書いた次回作は、「ミュージカルにしようか、時代劇にしようか……悩んだ末にブームにあやかって(笑)、時代劇を選んでみました」とのこと。そしてそのテーマは、「剣の腕がからきしダメな侍の仇討ちを天衣無縫に描く」もの。

その主役として「V6」のカッコいい岡田准一を起用したのはいいが、どうも

その描き方は喜劇風……？ 是枝監督自身がパンフレットで「この映画、弱かった人が努力して強くなる——といった“成長物語”の類ではないんです。“弱いもの”が弱いまま肯定されるというか……周囲の人たちとの関係の中で、その“弱さ”の意味が変わっていく——」と語りかけているが、予告編を数回観たうえでこれを読み、私は何となくイヤな予感が……。そして案の定……？

## 仇討ちとは……？

パンフレットが解説する仇討ちの「定義」は、「江戸幕府によって法制化され、合法的な殺人として認められた。父母や兄姉など目上の親族が殺害された場合のみに限られ、藩や幕府に届け出なければ決闘は許されないなど、厳密なルールが定められた。藩によっては褒賞金を出して仇討ちを奨励するケースも見られた」とある。これが学術的にどこまで正確なのかはよくわからないし、私にはかなりの疑問点があるが、それはさておき、仇討ちは神聖なもので人間の一生をかけた大勝負。

したがって、剣の腕がからっきしダメな侍が、腕の立つ相手を仇討ちしようとすれば、自分の剣の腕を磨くか、助太刀を頼むなど何らかの戦略を立てたうえで、相手を捜すのが当然。

ところがこの映画の主人公青木宗左衛門（岡田准一）は、「もののふとして闘い、敗れば桜の花のように潔く散ればよい」などとカッコいいことを言っているが、これがホントに腹の据わった本音とは思えない面が……。

## 赤穂浪士の討入りは仇討ちか……？

パンフレットには、元禄15（1702）年12月14日の赤穂浪士による吉良邸襲撃も「密かに仇討ちを計画」「主君の仇を討ち取った」と書かれている。しかし四十七士による吉良邸襲撃を「仇討ち」と言うのは、先程の「定義」に照らしても明らかにおかしいはず。なぜなら、藩や幕府への届出など一切なかったはずだから。

赤穂浪士のお話が結果として「美談」となったのは、さまざまな時代的要因にもとづくもの。事実としては、本質的にはヤクザの殴り込み抗争劇と同じで、決して仇討ちといえるものでないことは明らか。したがって、そもそも宗左の仇討

ちと赤穂浪士の討ち入りを対比させようとする発想自体がヘン……。ましてや宗左の仇討ちの成功が赤穂浪士の討ち入りを誘発したなどというは枝監督の解釈(?)は、あまりにも特異なもの……?

## 長屋住まいも悪くはないが……?

青木宗左衛門が住んでいるのは、家主の伊勢勘(國村隼)から不良住宅として近いうちに建替えすると宣言されているオンボロ長屋。今ドキのワンルームは、狭いながらも小ぎれいな部屋の中に風呂・トイレ・調理場がセットされているが、私の学生時代の木造2階建てアパートは、風呂はもちろんなく、共同便所が常識だった。そして、1702年当時の平屋建てのオンボロ長屋は、便所も戸外にある共同便所。したがって、その便所の「クソ」をめぐって、さまざまなコミュニティが生まれているから面白い……?

また、長屋には宗左の他、任官の口を探している侍の平野次郎左衛門(香川照之)や、侍の夫と死別して幼い進之助(田中祥平)と2人で生活している美人後家のおさえ(宮沢りえ)らも住んでいる。

その他は、①そそのかし・貞四郎(古田新太)、②ぶんぶん・おのお(田畑智子)、そして、③くそくらえ・乙吉(上島竜兵)、④てやんでい・留吉(千原靖史)、⑤びよんびよん・孫三郎(木村祐一)、⑥なげやり・そで吉(加瀬亮)、⑦恋する・お勝(絵沢萌子)、⑧さぼりの・善蔵(平泉成)など、さまざまなキャラクターの人物たち。

仇討ちのために仇を捜し求めている宗左だが、今では読み・書き・そろばんを教える「寺子屋」の経営者として(?)、長屋の共同テナントとのコミュニティを楽しみながら、おさえとのラブロマンスの可能性も秘めた生活ぶり。まさにオンボロ長屋でも、「住めば都」とはよく言ったもの……。

ちなみに、このオンボロ長屋には、赤穂浪士絡み(?)のキャラとして、①なりすまし・小野寺十内(原田芳雄)、②わらじの・寺坂吉右衛門(寺島進)、③つらよごし・鈴田重八郎(遠藤憲一)、④いらいら・横川勘平(田中哲司)、⑤かんじゃの・神崎与五郎(中村有志)、⑥知恵ぶくろ・重八(中村嘉葎雄)らもいたようだから、彼ら、彼女らの奇妙な個性は映画を観てじっくりと……。

## 長屋あれこれ……

私の友人の寺西興一氏は、大阪の阿倍野に古い四軒長屋を所有していたが、今般それが「寺西家阿倍野長屋」として全国ではじめて登録文化財として登録されたとのこと。今のご時世、ビルに建て替えた方が収益性がいいと勧誘されたいが、独自に計算してみた結果、必ずしもそうではないということがわかり、彼はこれを修理・保存して料理屋に賃貸し大成功しているとのこと。それが『大阪人』という雑誌（Vol.59・06年6月号）に大きく取りあげられていた。

他方、この映画に登場する長屋を観て私がすぐに思いついたのが、「破れ長屋」。これは将棋の世界で有名な坂田三吉を歌った村田英雄の名曲『王将』の歌詞である「あの手この手の思案を胸に、破れ長屋で今年も暮れた」から思い出したもの。もっとも、この映画のスクリーン上に登場するのは坂田三吉が住んでいた「破れ長屋」の数段上に行くオンボロぶり(?)で、この22間のオープンセットは、建築基準法上の建物とはとても認められないような代物であることは明らか……。

## につくき親の仇は……？

そそのかし・貞四郎は、時折仇らしき人物を見かけたと言っては宗左のもとに報告に来るのだが、それはいつも「はずれ」ばかり……。どうも貞四郎は、報告のたびにありつける、ちょっとしたごちそうを期待している感も……。ところが、やっと宗左が自分自身で見つけた仇、金沢十兵衛（浅野忠信）は、意外とすぐ近くに住んでいた。そしてこの金沢は、今は刀を捨てて人夫となり、妻子と静かに暮らしていた。

そんな金沢を討とうと何回か狙った宗左だったが、容易に切り込むことができないうえ、徐々に「仇討ちとは？」そして「なぜ今仇討ちをしなければならないのか？」と内心考えはじめていた。これは長屋の仲間たちとの交流や、おさえへの淡い恋心、そして何となく怪しげな赤穂の浪士、寺坂との碁を通じた触れ合いなどによるもの。したがってこれは、無為な生活の中で、初心を忘れてしまった墮落した姿と評価することもできるが、さてホントの評価は……。また、宗左が「実は仇は……」と貞四郎に話しかけると、何と貞四郎も既にそれを知ってい

た……。するとホントの仇の所在を知っていながら、貞四郎がそれを宗左に告げなかったのはなぜ……？

## こんな「偽装仇討ち」が認められるの……？

この映画最大の見どころは、偽装仇討ち。宗左は剣の腕はからっきしダメだが、長年の長屋住まいの中で、幸いなことに友人がいっぱい……。したがって、毎年花見の時期に行われる長屋恒例の「仇討ち芝居」を少しバージョンアップして、一世一代の偽装仇討ちを成功させれば、「よくぞ武士の本懐を遂げた。宗左こそ武士の鏡」と誉められて、100両はもらえそう……。そんな思惑のうえに、宗左が脚本を書き、ぴょんぴょん・孫三郎を斬られ役の主役に抜擢して、偽装仇討ちにチャレンジ……。

こんな弱い侍が、一体どうやって仇討ちをするのかとずっと考えながらスクリーンを覗いていた私は、突然こんな展開になったため、ビックリ……。昨年10月末に発覚した耐震強度偽装問題やホリエモン騒動、さらに公認会計士による粉飾決算という流れの中、「偽装」が今の日本の姿を象徴するキーワードとなったが、それは何とも嘆かわしい話。

私も弁護士として、建築基準法や証券取引法の抜本の見直し、そして専門家としての誇りを取り戻す方策の必要性を痛感し、懸命にアピールしているが、江戸時代の支配階級であり、知識層であった侍が、町人とするんで、率先して神聖な仇討ちを偽装するとは、一体何ゴト……？

是枝監督は、軽い気持で、ホントの仇討ちを避ける宗左たちの知恵として偽装仇討ちを思いついたのかもしれないが、そんなものが認められるはずはないもの。偽装仇討ちを成功させて、見事賞金を獲得すれば、それはユーザーの小嶋社長による「不作為による詐欺」どころではなく、誰にも明らかな立派な詐欺罪。ここはひとつ、真剣に是枝監督の釈明を聞きたいものだが……。

2006(平成18)年6月6日記